

日本中國學會便り

The Sinological Society of Japan | Nippon Chugoku Gakkai

二〇一八年（平成三十年）十二月二十日
第二號（通卷第三十四号）



八山人「安晚帖」木蓮園（泉屋博古館蔵）

◆目録

巻頭言

二 第70回記念大会から新たな出発へ

土田健次郎

四 〈読む〉と「いうこと」

——川合康三氏の一文に寄せて——

三浦 國雄

六 報告 第24回世界哲学大会（北京）

中島 隆博

八 京都大学―復旦大学―香港城市大学東ア

シア人文研究学生討論会

——学生間国際交流、六年間の歩み

祝 世潔

一〇 中国映画事情

蓋 曉星

十二 日本中国学会第70回大会開催報告

大木 康

十五 各種委員会報告

大会委員会／論文審査委員会／出版委員会／選挙管理
委員会／研究推進・国際交流委員会／広報委員会／将
来計画特別委員会

十七 二〇一八年度 会員動向／新入会員一覧

／二〇一九―二〇二〇年度 役員一覧

二〇 日本中国学会二〇一七年度（平成29年度）収支

決算書

二二 日本中国学会二〇一八年度（平成30年度）予算書

二三 事務局からのお知らせ

「国内学会消息」についてのお知らせ

二四 「日本中國學會報」論文執筆要領

編集●九州大学文学部 静永 健

〒819-0395 福岡市西区元岡744

メールアドレス：shizuka@lit.kyushu-u.ac.jp

発行●日本中國學會

〒113-0034 東京都文京区湯島1-4-25 斯文会館内

メールアドレス：info@nippon-chugoku-gakkai.org

日本語版ホームページ：http://nippon-chugoku-gakkai.org/index.cgi

第70回記念大会から 新たな出発へ

理事
長
土田健次郎

今年の10月6日と7日に行われた本学会の第70回記念大会は盛況のうちに幕を閉じました。開催校の東京大学の大本康会員をはじめとした関係各位に厚くお礼申し上げます。今回は特に外国から

ハーバード大学のマイケル・ピュエット教授、フランス国立東洋言語文化研究院 (INALCO) のクリスティーン・ラマル教授をお招きいただき、その講演は聴衆堂に満ち、まことに記念大会に花を添えた感があります。

個別発表は多岐にわたり、次世代シンポジウムも軌道に乗ってきました。後者に関しては、「いま『文選』を読む—中国古典文学の規範とその距離—」と「武人・武官と文学」という魅力的な題目で、座れる椅子を見つけるのが困難なほどの盛況でした。

開会式の時にも申したことですが、本学会の創立時の1949年は、敗戦の4年後で、まだ世情が落ち着いていなかった時代です。私はこの年に生まれたのですが、幼児の時の記憶では、東京の道路も舗装されていないところが多く、停電、断水は年中あり、市ヶ谷には米軍の宿舎が並び、繁華街では戦争で負傷した傷痍軍人が音楽を奏

でていました。敗戦によって戦前に日本を覆っていた価値観は批判の対象になり、伝統的なものは内容に関わらず否定する風潮が蔓延していた時代です。その中で本学会が旗揚げしたわけです。この年は中華人民共和国建国の年でもあり、そこに中国の未来への期待を持った会員もいた一方で、漢学の伝統への熱い想いを胸に秘めた会員もいました。

時代は下り、私が学部生時代は、大陸は文化大革命の真っ盛りで、本学会にも文革賛同者の会員がおり、執行部への攻撃もあったと聞いております。それでも本学会は分裂することはありませんでした。日本においては中国を対象にすると政治的立場を反映しやすいのですが、本学会は特定の政治的立場で固まるということではなく、このような多様性の許容も本学会の意義の一つであると思います。

創立当時、中国の思想や文学を研究対象にするためには、相当のエネルギーが要求されたことと思います。なぜいまだに儒教なのか、漢詩なのか、といった類の疑問は多数あったわけで、それでもとにかく中国学の全国組織を築こうとされた先学の努力には頭が下がります。もちろん当時は科学研究費取得のためといった即物的理由もありましたが、それだけでは学会の活動は活性化しません。堅実な研究を推進する母胎となりえたからこそ今の学会の地位が築かれているのです。昨今、人文学の衰退、中国をはじめアジア研究の弱体化が危惧され、その声さえ飽きられた感があります。しかし本学会創立当時の状況に比すれば、今はまだ温室に居るといってよいものです。戦後のゼロの時代から中国文化研究を興起させていった力が、我々の中にもあると信じたいものです。

日本の中国学は今転機を迎えようとしています。以前の日本の中国学が世界で存在感を持てた理由の一つは、環境がよかったことがあります。以前は日本は世界で最も資料が見られる場所でした。近代以前から日本が保存してきた漢籍のみならず、台湾、大陸、欧米にある資料や研究を広く見られる場所は当時稀でした。しかし今は中国における国際交流や出版活動の活性化、各国で作成されたデータベースの充実などもあって、中国をはじめ

諸外国は日本と同じ、あるいはそれ以上に多くの資料や研究を摂取できる環境にあります。日本の中国学が環境のよさに甘えていられたのは過去の話です。

また漢籍読解の修練も、日本の中国学を支えていたと思います。しかし大学の様相が変わり、また人文系の学問の衰退から、このような訓練の場を維持することも困難になりつつあります。各種データベースの利用が簡単にできるため、資料の絨毯爆撃で単語を広い集め羅列する類の研究は過去のものになっています。ただいくら検索できても内容理解が不十分では話になりません。朱熹は「義理」と「血脈」と「左驗」の三者が揃ってこそ書物の十全な読解が可能であるとししました。それぞれの単語の思想的含意の理解、文脈に沿って現れる思想の流れの把握、傍証の提示が必要だとしたわけです。また何よりも書物とは本来通読すべきもので、その書物全体の香を嗅ぎとらない限り、その書物のイメージは結ばれません。ただいづれにしろこのような読書には時間が必要です。今のように教員は書類提出に追われ、大学院生は業績の点数に心が奪われているようでは、研究の射程距離は短くなるばかりです。

もちろん旧套を墨守していればよいというわけではなく、新たに種々の視点や研究成果を導入すべきなのは言うまでもありません。しかし欧米の方法論の十年遅れの導入とか、よくある学際物というものだけでは寂しいものです。本学会では次世代シンポジウムとして毎年パネルディスカッションを募集し、その成果を「研究集録」として掲載しております。学会報はあくまでも絶対基準で論文審査することでレベルを維持し、冒険はこちらの方でやってもらおうということです。多少荒削りでも将来を感じさせるものを期待します。学会報が「中行」ならば、研究集録が「狂者」でしょうか。「狂者」はしばしば未来を拓きます。

学会の未来を考えると、国際化は学会が避けて通れぬ課題です。このところ学会会計は黒字で、それを維持するように努力していますが、それはいつその国際化を求められた場合、それに対応する資金を考えておかなければならないからでもあります。ただ国際化というのは

現実には非常に難しいもので、不慣れな外国語で細かいニュアンスを犠牲にした大雑把な議論を展開するのであれば、むしろ内容が薄くなることの方が危惧されます。今は海外の国際学会で発表するのが以前よりずっと容易になりましたので、特に若い会員諸氏はまずそちらの方で積極的に活動し、国際場裏での経験を蓄積してほしいと思います。今夏、上海の復旦大学で開催された「国際宋明理学論壇」に、私は数名の会員の方たちと参加し発表しましたが、大陸、台湾、韓国、日本の研究者のみならずアメリカのハーバード大学のピーター・K・ボル教授やアリゾナ州立大学のホイット・ティルマン教授を交えての中国語を通しての議論はやはり有意義であったと思います。私などよりはるかに海外での国際学会の経験を重ねた会員が増えていくことで、本学会の国際化の方でも新たな局面が切り開かれていくのではないのでしょうか。

研究とは普遍性を求めるもので、日本だけで通用する研究に閉じ籠もることですむわけはありません。実証的研究が世界の中国学に貢献するのはもちろんですが、思想、文学、言語などの普遍的問題について寄与することも重要で、その結果中国文化という研究対象や日本の研究の特殊性が炙り出されることになっても、それはそれで意義のあることだと思います。またこのような試みが機縁で、他分野の有為の若手研究者が中国研究に足を踏み入れることもあるかもしれません。

長い目で見た場合、戦後の70数年間、中国研究は戦前を越える充実を見たとはいえなくとも、それなりの新たな展開も見せてきたと思います。それは敗戦によってもう過去の伝統にもたれかかれなれないという意識が働いたからではないのでしょうか。そうであるならば、日本の中国文化研究が危機に直面しているという認識が共有されつつある現在が、むしろ中国学の新たな発展への出発点になることもありうることです。70回記念大会の盛況からもそれを予感したと言ったら楽観にすぎるでしょうか。来春には金文京会員が新理事長に就任されますし、本学会が今後いつそう斯学を牽引していくことを期待しております。

〈読む〉ということ

川合康三氏の一文に寄せて

三浦 國雄

元四川大学客員教授

自分の軽率さを後悔しても後の祭り。私に対する敬意から云われたことではあろうが「大所高所」なんてガラでもないし、だいたい自分のやってきたことは「小所低所」からの「隙間産業」みたいなもので、最近では学会からも遠ざかり若い人達の論文もロクに読んでいないので、そんな批判なんてまことにおこがましい。わが国の中国研究や学会のあり方については、当学会創立五十周年の節目に編まれた『日本中国学会五十年史』（平成10年、汲古書院刊）に譲りたい。興膳宏さん主編の本書は、二十年前に編まれたものではあり、古典学の制度的な地盤沈下をはじめとして、学会の内外で生じたこの二十年の変貌振りは尋常ではないけれども、基本的・本質的な問題点はすでにそこで適確に指摘されている。手前味噌ながら、私もそこに一文を掲載させていただいている（「中国研究この五十年—哲学・思想」）。

研究推進・国際交流委員会の宇佐美文理さんから、大所高所から見た現在の中国学研究について何か御意見・御批判をいただきたいという趣旨の依頼を頂戴して、安易に引き受けてしまったのだが、自

そうなる、私の出番はいよいよ無くなってきて、いったい何を書けばいいのか、途方に暮れていた折りしも、本誌前号所載の川合康三さんの文章に出会った。川合さんは古典文学、当方は古典思想という違いはあるにせよ、同じ中国の古典世界を対象としていること以上に、研究対象（当方では〈作品〉とは呼ばないが）に対するスタンス——つまり、どう読むか——という点において大いに共鳴しました啓発される場所があった。

川合さんは若い頃、中国古典文学の研究なるものは結局のところ、「人の書いたものを後から追いかけているに過ぎないのではないか」という思いに囚われていたと述懐されているが、実は私も若い一時期、中国学というのは要するにゴミ捨て場を漁って歩くようなもので、こんな営みのどこが面白いのか——という煩悶を抱いていたことがあった。当時そのことをある中国哲学の大先輩にぶつける機会があったが、その先輩から言下に力強く、いやそうじゃない、中国学で論文を書くのは一つの創造的行為なんだと諭されて、私は迷妄の霧が霽れて行くのを覚えた。

ここで問題になるのは〈創造〉ということで、これが川合さんの文章のキーワードになっている。川合さんは当初、〈読むこと〉を〈書くこと〉に対比させ、「作者のあとを追いかける読む行為とはまったく違って、書くことはこの世に新たなものを創り出す営為なのだ」という信奉、ないしは羨望があった」と告白する。ここで川合さんの云う〈書くこと〉とは、文字通り自分で詩文を作り出す創作行為を意味している。有り体に云えば、学者より作家・詩人の方がエライということである。ついで川合さんは論旨を大きく転調させ、その「新たなものを創り出す営為」を、〈(中国古典文学を)読むこと〉のただ中に持ち込み、「読むことによって作品を新たによみがえらせる、新たに創り出すという読み方」、換言すれば「再創造の行為としての読むこと」を提唱する。もとよりそこには中国学の「広く深い学識」と「厳密な手続き」（つまり〈考拠〉や〈実証〉と云われるもの）とが前提にされているとはいえ、これはある意味過激な言表と云わねばならない。

このような〈再創造〉としての読み方を、古典思想文献に持ち込めばどうなるか。

私の乏しい知見の囊中を探ると、所謂〈新儒家〉と呼ばれる人々の活動が思い浮かぶ。

そこでは儒家思想が現代に生きる思想ないし哲学として仕立て直されている。たとえば、新儒家を代表する馮友蘭の『新理学』をはじめとする「新〜」シリーズでは、西洋哲学を媒介にして儒家思想を核心とする伝統的な中国思想が現代哲学へと止揚されている。たとえば宋明理学の〈理〉は、「ある事物のある事物たる所以のもの」、〈気〉は「一切の事物が持っているところの、それによって存在することができるもの」（以上『新知言』第六章「新理学的方法」）などと再定義されている。ちょっと唐突で乱暴な言い方になるが、こういう試みの逆を行っているのがフランスのフランソワ・ジュリアン氏ではないだろうか。氏の『無味礼讃—中国とヨーロッパの哲学的対話』（興膳宏、小関武史訳、1997年、平凡社）などを読むと、中国の古典思想をヨーロッパ哲学に真正面から対峙させ、〈回光返照〉と云うべきか、その古い東方からの光によってヨーロッパの哲学・思想を賦活させようとする、新しい哲学の構築が試みられている。氏はフランス・シノロジーを継承するまっとうなシノロジストであり、自分の主張に合わせて中国の古典文献を恣意的に解釈するようなことはしていない。

こうした古典文献（テキスト）の読み方については、山口久和氏に「シノロジーの解剖」と題された一連の論文があり（一〜五）、詳細はそちらを参照していただきたい（大阪市立大学文学部『人文研究』46, 47, 49, 52, 55）。中国の古典解釈における「客観性の神話」を鋭く批判し、ニュークリティシズムなどを援用しつつ、読む行為は必然的に「自己回帰的性格を持つ」とする氏の斬新な解釈論は、「読み手は作者の意図を越えて読み解いていく」とする川合氏の所論と通底している。わが国の中国学徒は、こうしたシノロジーの根幹に関わる議論にあまり熱心でないのはどうしてだろうか。

そのことはともかく、私自身に戻って云うと、これまでやってきたのは〈哲学〉ではなく〈思想史〉であり、

古人の真正の声を聴くことを目指してはきたけれども、せいぜい〈再解釈〉止まりで〈再創造〉などは初めから目標の外であった。ここでは、私の〈読む〉体験の中の、私が勝手に〈読むことの極北〉と呼んでいるある先人の読み方を披露して拙文を閉じることにしたい。その先人とは入矢義高先生、テキストは『龐居士語録』である。入矢先生は紹介するまでもない、戦後のわが国シノロジーの最盛期を代表する碩学の一人（私たちの世代が生まれた時代は何休の三科九旨説を振って云えば幸運にも「所見の世」に当たっている）。『龐居士』は中国の維摩も云われる中唐の在家の仏教徒。まず原文を引用する。引用に登場する「薬山」は薬山惟儼、禅宗史では必ず言及される傑出した禅僧である。

居士因辞薬山、山命十禅客相送至門首。士乃指空中雪曰、好雪、片片不落别处。

このあと続きがあるが、核心部分はこの二行である。もっと云うと、「好雪片片不落别处」の八文字である。この八文字に対して入矢先生はまず、「好雪片片」と句読を切るのは誤りで「好雪！」は感嘆の語だとし、ついで「満地の白雪や白一色の銀世界を目に入れての発言などでは全然ない。まして、これを清浄な〈平等無差別〉の世界での個々の雪片の差別相といったような視点で見ているのではない」と旧解を批判して、こう云われる。

居士はこの時、雪のすべての一片一片が、まさに落着すべきところへ無心に落着いてゆく、あたかも意あってそうしているかに見えるほどの見事さに心打たれたのである。

（『禅の語録7 龐居士語録』、昭和48年、筑摩書房）

この箇所はいつ読んでも胸が熱くなってくる。そしてその都度、「何故そう読めるのか」ではなく、「このような読みはどこから生まれてくるのか」、「どうすればこのような読みができるのか」と思うのは、自分もこのような読み方を一度でいいからしてみたいという〈野心〉があるからであろう。

報告 第24回世界哲学大会（北京）

中島
隆博

東京大学東洋文化研究所

一 学んで人になる

2018年8月13日から20日にかけて、第24回世界哲学大会 World Congress of Philosophy が北京で開催された。大会登録者が八千人の規模に膨れ上がったために、主会場は北京

大学からオリンピック公園にある国家会議センターに変更となっていた。

13日の開会式は、人民大会堂で行われた。わたしは参加できなかったが、開会式では杜維明先生がスピーチをされた。杜先生は、ハーバード大学から北京大学の教授に移られて、かなり経ったかと思われるが、今回の北京の世界哲学大会のテーマを提案されたのが杜先生であった。全体のテーマは「学以成人」すなわち「学んで人になる」というもので、新儒家の学者である杜先生らしく、「学んで聖人になる」を現代的に展開したものであった。また、そのサブテーマとしては「東西の会通」が掲げられたが、大会の発表を概観してみると、圧倒的に中国と西洋の比較哲学が多かった。

二 哲学の夕べ

今回のわたしのミッションは二つあった。一つは、次回の世界哲学大会（日本では世界哲学会議と呼んでいる）を

東京に招致するために、日本の WCP 招致実行委員会のメンバーとして活動することであり、もう一つは、今回の世界哲学大会において、事前に審査された論文に基づく発表セッションのモデレーターを務めることであった。

まず、前者の WCP 招致実行委員としての活動であるが、日本中国学会から推薦された委員として、半年ほど前から準備を進めてきた。ギリシア哲学の納富信留先生（東京大学）を中心にして、東京での次回の大会の全体テーマを、「世界哲学」それ自身に据えて、その内容をコンパクトにまとめたビッドペーパーを作成し、北京の会場で配布するというのが基本的な作業であった。最初の山場は13日の初日の夕方にあった。すなわち、「哲学の夕べ」と題した集まりを会場で開いたのである。

「哲学の夕べ」は、公益財団法人東京観光財団等々のご協力もいただきながら、会場を一つ借り切って開催した。幸いにも、各国の哲学者に、40名ほどだったであろうか、出席をいただいた。日本側からのプレゼンの中心は、納富先生からの「世界哲学」に関するものであり、北京大会との区別を際立たせたものになった。すなわち、よりローカルな哲学にも目を配りながら、ともに哲学の普遍性に参加していくような「世界哲学」を構想しようというものであった。日本で開催する場合に、さすがに日本哲学と西洋哲学という設定ではもたないであろうし、そもそも「東西の会通」が五年後にもなお有効なテーマかどうかはわからないからであった。

その後、何名かの各国の哲学者にスピーチをいただいたが、おおむね好意的な反応であった。世界哲学大会を主催する哲学系諸学会国際連合の会長であるダーモント・モラン先生（ダブリン大学）からもスピーチをいただくことができたのは幸いであった。

次回の大会には、東京の他に、メルボルン、リオデジャネイロ、テヘランが立候補していて、なかなかの激戦であった。結局、16日の総会において、一次投票で東京は第三位となり、決選投票に進むことはできなかった。決選投票にはメルボルンとリオデジャネイロが進み、メルボルンが選ばれることとなった。残念な結果に終わったが、メルボルンの次を目指して活動は続けることになる。

三 比較哲学のセッション

さて、もう一つのミッションは、セッションのモデレーターであった。モデレーターとなったのには背景がある。

実は、あるご縁があって、一年少し前に、会長のモラン先生から投稿論文の査読と大会でのモデレーターを務めるようにとの依頼を頂戴していたのである。

論文の査読はなかなか難儀であった。というのも、わたしが拝読したのは比較哲学の論文であったのだが、テーマの多様さに浅学菲才を思い知らされる一方で、「比較」をやや勘違いしたのも見受けられたからである。去年の冬から今年の春にかけて、かなりの数の投稿論文を拝読し、その中の何名かとは北京で会うことができた。

わたしがモデレーターとして関わったのは比較哲学のセッションであり、3日間毎日一つ割り当てられていた。全体を通して「東西の会通」がやはり基調音であった。14日は、スーフィズムと儒教、儒教とカント、孔子とソクラテス、そしてインド言語哲学とヴィトゲンシュタインの会通であった。どの発表も類似性を強調するあまり、比較のための比較になっているような印象を受け、やや哲学的には物足りないところがあった。

15日のセッションでは、ポーランドと中国の心身理解、上座部仏教と決定論、新儒家とりわけ牟宗三、アリストテレスと儒教、バーナード・ウィリアムスの道徳理論、とややテーマティックな発表が多かった。それでも、内容はやや低調であり、発表者が多く喋りすぎたこともあって、全体討論には入れなかった。

16日は、比較的うまくいった。アリストテレスと荀子、道徳経の自然主義的読解、ショーペンハウアーの「マヤ」理解、老子とヘラクレイトス、鈴木大拙とマックス・ヴェーバーであったが、テーマに重なりがあり、また発表者が時間を遵守してくれたので、相互の質疑応答、全体討論まで持っていけたからである。

四 中国哲学

北京大会で楽しみにしていたのは、中国哲学のセッションであった。「東西の会通」を掲げる以上、中国哲学がどのような存在感を示すのかは重要なポイントであったからである。その中で興味深かったのは、ロジャー・エイムズ先生（北京大学）が主張する役割倫理や Human Becoming という概念がかなり共有されていたことである。中国哲学の今日的な意義として、西洋の徳倫理や Human Being という概念をより洗練し、他者との関係の中で自ら変容するという方向性が、すでに広く共有されていたのである。

もう一つ興味深かったのは、干春松先生（北京大学）とアンヌ・チャン先生（コレージュ・ド・フランス）との座談であった。干先生からは、最近の中国哲学界における「天下」概念の広がり、それに内在する緊張した議論を伺った。ディスコースの権利を回復しようとする、近年の中国での流れとどこか重なるものであるが、これには日本も決して無縁ではない。近代の日本の経験（光と影）や、日本でのディスコース（たとえば、竹内好の「方法としてのアジア」）から汲み取りながら、「天下」をめぐる議論はなされているのである。

もう一つ干先生が強調していたのは、最近の「新康有為学」とでも言うべきブームである。帝国の終焉に登場し、近代の矛盾を生きながら、未来のあるべき社会を構想した康有為が、まさに今日新しい光のもと読み直されている。無論、康有為にとって、近代日本の経験は決して見落とすことのできるものではなかった。「天下」論にせよ、「新康有為学」にせよ、日本の中国研究者の貢献を強く求められたのである。

五 来るべき東京大会にむけて

今回はメルボルンになったのだが、もしその次が東京大会と決まった場合、日本の中国研究者とりわけ中国哲学研究者の役割は重要である。というのも、中国からの参加者が数多くなることは容易に予想され、同時代的な中国哲学の問題系にどうしても応答せざるをえないからである。また、東京大会が「世界哲学」を全体テーマに掲げていることにも十分考慮する必要がある。つまり、地域哲学もしくは地域文化としての中国哲学ではなく、世界哲学としての中国哲学を構想しておかなければならないのだ。

そのためには、「東西の会通」を超えた、より多角的なアプローチが求められることだろう。少なくとも、双方向を超えた三方向からのアプローチについて、理論的にも準備しておく必要がある。それは、フランス語で書かれた中国思想史を日本語に翻訳するというプロセスにも似た忍耐を必要とするのかもしれない。だが、よく考えてみれば、それは日本における中国研究とりわけ中国哲学研究がかつて行っていたことでもある。その豊かな遺産を継承し直しながら、新たな世界哲学としての中国哲学をともに構想できればと思う。

京都大学ー復旦大学ー香港 城市大学東アジア人文研究 学生討論会 ー学生間国際交流、六年間の歩み

祝 京都大学
世 潔

2018年3月18日から21日までの間、第6回京都大学ー復旦大学ー香港城市大学東アジア人文研究学生討論会が京都大学において開催された。この三校間学術交流は、2013年3月に京都大学で初めて行

われて以来、既に6年の年月を歩んできた。最初の三回は京都大学と復旦大学との二校間交流であったが、2016年の4回目より香港城市大学が加わり、2017年には香港開催が実現、その後京都・上海・香港を三校の学生たちが行き来する三校間学生学術交流が定着した。

参加者は、各大学の基本的に博士課程以上の学生である。専攻分野はそれぞれ異なり、文学・言語・歴史・思想・地理・社会・宗教・芸術・文物・教育・学術・考古など、多種多様な興味関心を持っており、発表も当然ながら多岐にわたる。しかしそれが故に、同じく人文学研究者の卵として、日常の研究環境では接することのない学問領域に触れることにより、研究視点や研究手法の面において新たな発見と手がかりを得ることとなる。この学生を中心とする討論会の目的は、まさに人文学の国際的・学際的交流により、知的な刺激を相互に与えること

にあるのだ。

今回当番校となった京都大学では、まず参加学生による実行委員会を組織した。研究発表に続いて実施する「京都講座」のテーマを「国際交流と土着文化」と定め、各科目の講師を立候補で選出し、講座の一環として実施する市内巡検・市外巡検の訪問先を、地理学の田中和子先生、中国哲学史の宇佐美文理先生、中文の木津祐子先生らと相談して選定した。

いよいよ迎えた初日、開幕式では、京都大学社会学研究室的松田素二先生がまず主催側の挨拶をされ、復旦大学の楊志剛先生（張佳佳先生代読）と香港城市大学の李孝悌先生（陳学然先生代読）の祝辞が続いた。その後は本討論会の中心である研究発表が、19日の午前まで続き、三校から集った計34人の学生が、一日半の間に密度の高い発表と活発な議論をやり遂げた。開幕の全体討論は、三校から一人ずつの代表発表である。京都大学地理学研究室の熊野貴文氏が「Restructuring and Generational Transition in Japan's Metropolitan Suburbs」、復旦大学文史研究院の楊潔氏が「關中元墓的發現與研究」、香港城市大学中文及歴史学系の董顕亮氏が「Cold War Influenza : The Discourse of Hong Kong Flu and Its Global Controversy, 1968-1972」を発表した。

その後、コーヒープレイクを挟み、セッション討論が二会場に分かれて行われた。第一会場では、文学／宗教、芸術／文物、文学／文人、現代学術／教育という四つのセッションが設けられ、第二会場では、歴史／思想、歴史／地域、思想／学術交流、現代社会／制度という四つのセッションが同時進行された。発表者に与えられた時間はそれぞれ20分で、セッションごとに15分の質疑応答が集中的に行われる。発表と質疑応答の言語は中国語か英語である。会議日程と予稿集を手にした参加者は、関心の有る発表を聴講し議論に参加するために、向い合せの会場間を賑やかに行き来した。

一日半にわたる各セッションの研究発表がすべて終わった後、全体の総括討論が行われた。各司会者はまず自分が担当したセッションの発表内容を簡単に紹介し、その後、フロアから活発な質疑応答が行われた。各発表

に関する個別の質問もあったが、最も議論が白熱したのは、自分の研究を如何に異なる分野の研究者に伝えるか、どのような言葉で伝え、そこから何を学ぶのかという、研究の基本姿勢に関するものであった。

このような人文学研究の根本に着目した議論は、実は今までの討論会でも重ねられてきた。例えば、昨年の香港城市大学のラウンドテーブルでは、「理論」の扱いについて、先生も交えて活発に意見を交わし合った。これこそ、他分野の学生によって構成されたこの三校学生交流討論会ならではの特徴と言えるであろう。今後も、人文学徒が持っている共通の思考や課題を率直に話し合うことにより、より広い視野で各自の研究を位置付けることができるよう、取り組んで行きたい。

19日の午後には、「国際交流と土着文化」をテーマとする京都講座が開かれた。このようなご当地講座も毎年の討論会で必ず実施されるプロジェクトである。開催地の人・文化・歴史・地理などについて、ゲストにより深く理解してもらえるように、開催校の学生が特定の主題の元で、手分けして文献検索や実地調査を行ったうえで、関連資料を予稿集にも掲載して講義を行うのである。

今回の京都講座では、京都大学の諸学生が、京都とその周辺地域の歴史と文化を、国際交流との関わりから解説した。

この京都講座を踏まえ、20日には市内巡検が実施された。午前には宇治市の黄檗寺大本山萬福寺を訪れ、重要文化財鉄眼一切經の版木からの印刷現場見学という貴重な経験を得た。昼ご飯には萬福寺黄龍閣の普茶料理に舌鼓を打ちつつ、開祖の隠元禪師が中国から伝えた食文化を実体験した。

午後は、前日の京都講座で取り上げた平等院・伏見の酒蔵・石清水八幡宮の三箇所を三組に分かれて見学した。筆者は伏見の酒蔵組の案内役を務め、ゲスト十人ほどとともに月桂冠大倉記念館にて酒造りの現場や材料などを前に、スタッフの説明を中国語に翻訳して伝えたが、非常に学ぶところ大であった。

21日には、滋賀県と三重県の県境近くに位置する道の駅「奥永源寺溪流の里」までバスで移動した。

午後には、滋賀県甲賀市信楽郊外の山中にある、中国系アメリカ人建築家「貝聿銘 (I.M. ペイ)」が設計したMIHO MUSEUMを訪れた。春寒料峭の冷たい風に身を締めながら、「桃源郷」をイメージした長いトンネルを抜け、MIHO MUSEUMが所蔵する2000点以上のコレクションをじっくりと見て回った。

このように、われわれの討論会は例年、研究発表だけではなく、巡検を通して三校学生間の親交を深めてきた。昨年は香港の海事博物館・南蓮園池・屏山文物径を回り、香港の現代と歴史文化により深い理解を得た。一昨年の上海開催では、蘇州の塔と上海の水について元明清の遺構をたどりながら、数多くの新しい知識を学んだ。このように自分の足を用いて、頭脳ではなく五感で感じ取った土地の感覚は、人と文化を扱う我々の研究にとっても、大きな経験知・財産として、心の中に長く止まることであろう。

2019年の開催校は上海の復旦大学となる。19日午後の閉幕式では第7回開催校の復旦大学を代表し、段志强先生が「来年上海で会いましょう」と歓迎の辞を述べられた。毎年の討論会は旧友に再会する場であり、新しい友情を生み出す場にもなっている。SNSなどを活用し、リアルタイムで研究情報を交換する研究者ネットワークも広がりつつあるが、京都大学－復旦大学－香港城市大学三校間の学生が、実際に顔を合わせ議論を戦わせ、食事と散策を共にする地道な交流は、五感をフル回転させる学生間学術交流として、これからも時代と共に新たな輝きを放っていくことを確信している。



総括討論の様子 (2018年3月19日)

中国映画事情

蓋 曉星

二松学舎大学非常勤講師

是枝裕和の『万引き家族』が、第71回カンヌ映画祭で最高賞のパルムドールを受賞したことは記憶に新しいが、同映画祭のコンペティション部門には、是枝と親交がある賈樟柯の『アッシュ・イズ・ピュアレスト・ホワイト』（原題：『江湖儿女』）も出品された。筆者未見のため評論できないが、「その代わりに」というわけではないが、今年発表された新作映画評論集『虚無的質感』（金城出版社、2018）での評論家梅雪風の優れた賈樟柯分析を紹介したい。

賈樟柯が時代に対して敏感な触覚を持っていることは疑問の余地がない。そのうえ、優れた抽象化能力をも併せ持っている。（中略）『一瞬の夢』『プラットホーム』『長江哀歌』、我々はこれらの映画から、卑近な切り口から中国全体を描こうとする彼の野心と能力を感じることができる。違うのは、『一瞬の夢』『プラットホーム』からは、まだ彼の登場人物への切実な愛情を感じ取れるが、『長江哀歌』になると、登場人物がそれぞれ何かを象徴している存在であることがあまりにも明確になっており、映画の最

後に現れた二棟の廃墟の間で綱渡りしている人のようになっている。

新作『アッシュ・イズ・ピュアレスト・ホワイト』はアウトローの二人の男女を巡る物語で、17年間にわたる二人の愛憎及び中国社会の変遷を描いた映画だということだが、登場人物の個性の描き方に注目して鑑賞したい。

続いて、中国映画界の最新事情及び話題作をいくつか紹介する。

さる6月、15年前大ヒットした映画『手機』の続編にあたる『手機II』の上映が発表されたときに、映画のモデルにされた崔永元が監督の馮小剛に対して抗議¹⁾した。その過程で中国芸能界の「陰陽合同」（脱税のため、税務機提出用と個人用の二種類の出演料契約書を作成したもの）が大きな話題となり、映画創作に関するモラル問題も注目された。一大産業として伸び続けている中国の映画文化だが、その裏側にさまざまな問題が見え隠れしているのも事実である。

その馮小剛監督の2017年末の作品『芳華』は、中国で14億円の興行成績を上げ、世代を超えた人気作となり、今年の3月、日中国交正常化45周年を記念して東京、大阪、名古屋で開催された中国映画祭「電影2018」のオープニング作品として選ばれた。中国人民解放軍の文芸工作隊（文工団）という華やかな世界で生きる人々の青春、心情、すれ違いの恋心を描いており、その時代背景として文革、中越戦争を経て改革開放時代に突入しても変わらない、中国の「階級」社会の実態が映し出されている。人気サイト「豆瓣網」の評価は7.7（47.7万人余り）で、「文革世代の青春と運命に共感を覚えた」、「階級差の描写、集団主義への疑問はとても現実」、「社会の不平と残酷を感じた」点などが評価されている。一方で、「監督は登場人物の女性たちを猥褻な視線で見ている、文革版の『青春に捧ぐ』レベルだ」「原著より人物の描写が単純化

1) 『手機』は CCTV キャスターを務めた崔永元をモデルにした人物を主人公に据えた作品なのだが、作品中に架空のスクandalを挿入し、鑑賞者がそれを事実だと思い込んでしまい、本人及び家族に大きな風評被害を与えた。その続編にあたる『手機II』を上映するにあたり、企画段階では制作側が崔に別のタイトルにすると話していたそうだが、この約束は結局守られなかった。

されていて、心に響かない」といった批判もあった。

また、昨年10月に行われた第30回東京国際映画祭の特別招待作品として披露され、中国で上記の『芳華』とはほぼ同時期に上映された夢枕獯原作、陳凱歌監督の日中合作映画『空海 KU-KAI 美しき王妃の謎』（原題：妖猫伝）も、賛否両論の一作となった。「豆瓣網」採点は6.9（40.5万人）、興行成績は5億元にとどまった。製作費用150億円、舞台となる長安の撮影セットを6年間かけて設営した割には、期待外れだったと感じた観客も少なくなかった。一方、『芳華』のインテリ層からの評判が芳しくなかったのと異なり、『空海』は一般大衆の間では批判されなかったが、インテリ層はやや高く評価している。

批判されている点は「CG映像是『春晚』（中国の紅白歌合戦）レベル、物語の展開はイマイチ、人物の描写は中途半端、訳が分からないファンタジー」など。評価されている点は「映像が美しい、唐時代の雰囲気がよく表現されている」「監督は観客に媚びない、少年の心を貫いている」「映画の見どころは愛情ではなく、真実と嘘を見抜いて人生を悟ることだ」「唐玄宗と楊貴妃、白居易の性格を鋭く描き、『長恨歌』の真意を伝えた」などである。

日本では今年2月に一般公開された。空海の伝記だと勘違いされて映画館に足を運ぶ鑑賞者が少なくなかったようで、評判もあまり芳しくない。『キネマ旬報』（2018年3月上旬号）に掲載された四方田犬彦氏の作品評では、皇帝の寵愛を受ける幻術使いの兄弟白龍と青龍は楊貴妃の誕生日祝宴で「位階を超えて好き勝手に振る舞い」、「現実と幻想の境界を軽々と凌駕することの喜び」が表現されており、楊貴妃に優しい言葉がかけられたことで「生涯の情熱を、彼女のために捧げようと心に誓う」ことから、「この至福の瞬間がもつ隠喩的意味」は文化大革命であると述べている。さらに、彼らが楊貴妃の悲惨な死に持たされた幻滅、復讐、そして最後の解脱は文革終了後紅衛兵たちが経験した精神的な変化であると解説している。確かにこの映画の中にあった幽霊の描写も、文革を描く作品の中ではよく見かけられることである。例えば、ユン・チアンの『ワイルド・スワン』（1993）や畢飛宇の『平原』（2005）、いずれも幽霊の話が出ている。

中国でこのような隠喩を読み取っている映画評は、現時点では見当たらないが、筆者の友人である中国近代文学研究者も、陳凱歌は文化大革命を意識したのではないかと感じたという。ただし、四方田犬彦氏という「隠喩」とは逆の意味で。北京在住の彼女は、この映画で描かれている唐の自由な雰囲気には惹かれるものがあるという。そして「閉塞感のある現代や文革時代と対照的な時代として、自由な唐代を描いているのではないかと推測している。陳凱歌は上述の『キネマ旬報』におけるインタビューで「唐は自由な時代だった」と答えており、彼女の見方も一理あるのではないだろうか。

最後に、今年度のヒット作『我不是薬神』を取り上げよう。1984年生まれの新鋭監督文牧野が、2015年発生した「陸勇事件」に基づいて作った作品である。映画の舞台は2002年の上海に設定されている。主人公程勇がある慢性骨髄性白血病患者の依頼を受け、インドから闇のルートで高価な薬品の模造品を格安の価格で入手し、大儲けする。だが、間もなく製薬会社は模造品の流通に気づき、警察に通報。身の安全のために、程勇は別の闇業者に模造品の転売を委ねる。しかし、その闇業者は倍以上の価格で販売したため、患者からの支持を失い、業者は指名手配された。一方、模造品を入手することができなくなった先述の患者は病状悪化により亡くなってしまふ。その後程勇は金儲けや違法のことを念頭に置かず、ただ正規薬品に手が届かない闘病中の患者のために代理輸入を再開したが、結局逮捕を免れなかった。

この映画は、ユーモラスな描写で始まり、次第に中国社会の深刻な現実がリアルに描かれるようになる。「豆瓣網」の採点は9.0（70.7万人）という異例の高評価であり、興行成績は31億元に達し、『芳華』や『空海』を遥かに超えている。第五世代は自らが理想とする芸術的表現に拘るのとは対照的に、若手監督はカメラを現実社会の様々な問題に向ける。ハリウッド風に中国軍人の活躍を描いた『戦狼II』（2017年、上記サイド7.1点、55.7万人、興行収入56億元）を観て高揚感をおぼえた観客も多数いたが、『我不是薬神』のようなシリアスな映画のほうが明らかに高く評価されている。

日本中国学会第70回大会 開催報告

大木 康
東京大学

2018年10月6日(土)、7日(日)の両日、東京大学駒場キャンパスにおいて、日本中国学会第70回大会が開催されました。10月とは思えぬ30度近い暑さには悩まされたものの、両日も好天に恵

まれ、420名にのぼる参加者をお迎えし、何とか無事に会を終えることができました。まずはこの場をお借りして、ご参加くださったみなさま、さらに各種の発表をしてくださった先生方、そして司会をおつとめいただいた先生方に、大会準備委員会を代表し、心より御礼申し上げます。

東京大学の駒場キャンパスは、かつて旧制第一高等学校があった場所です。第一日目の受付には、正門を入れて正面、時計台のある一号館の教室を使い、同じく第一日目の午後に行われました記念シンポジウムは、900番教室(大講堂)にて行いました。この一号館と大講堂は、旧制一高時代から使われ

てきた古い建物です。そして、研究発表は21KOMCEE(21 Komaba Center for Educational Excellenceの略称)で行われました。この建物は、いくつかの大教室やカフェテリアなどを持つ、駒場キャンパスの中でも最も新しい施設の一つです。古い建物から最も新しい建物まで、東大駒場キャンパスの時間旅行をお楽しみいただけたかと思えます。大会の記念写真も、一号館正面の階段を利用して撮影しました。

さて、肝心の研究発表についてですが、今回は第70回大会ということで、理事会から特別なご援助をいただき、海外から先生をお招きした記念のシンポジウムを開催することができました。記念シンポジウムは「世界的視野から見た中国学」と銘打ち、アメリカ・ハーバード大学のマイケル・ピュエット(Michael Puett)教授、そしてフランス・INALCO(国立東洋言語文化大学)のクリスティヌ・ラマール(Christine Lamarre)教授から、それぞれ「グローバルな視野から中国哲学を考える」、「シノロジーから言語科学まで——ヨーロッパの中国語学の多様性」と題してご講演をいただきました。

ピュエット教授は、中国古代哲学がご専門、最近日本でも『ハーバードの人生が変わる東洋哲学』(早川書房)が刊行され、話題を呼びました。ピュエット教授はご講演で、中国哲学を従来の地域研究の枠組みから解き放ち、



記念シンポジウムの様子



次世代シンポジウム会場風景

哲学というディシプリンの中に置くことによって、新たな哲学的可能性を開くことができるのではないかと提案されました。とりわけ、「在来の理論」に注目することで、中国哲学が普遍的なものに責任を負う新しいあり方について論じられました。

ラマール教授は中国言語学がご専門、かつて東京大学の駒場キャンパスで、中国語の教授をつとめておられました。ラマール教授は、はじめにヨーロッパにおける中国語学と中国文学研究のあり方について詳しく解説され、次いで、フランスの最近の制度改革の中で、中国学が従来の地域研究としてのシノロジーを超え、より広い学問編成の中に置かれたこと、そして他者として中国を見ることを離れて、世界と結びついた中国として見ることへと概念枠組みが変化していることを指摘されました。

中島隆博教授が司会を（通訳も）つとめられたこのシンポジウムにおいて、いままさに世界中がその渦の中にあるとってよい中国学の大きな地殻変動の時期に、非中国語圏に属するアメリカとフランスにおける中国学の

現状をお話いただいたことは、やはり非中国語圏にある日本において、これからの中国学がいかにあるべきかを考える上で、重要なヒントになったのではと思います。会場からも多くのコメントや質問が寄せられ、なかなか充実したシンポジウムになりました。

本大会では、通常の研究発表に加え、前回、前々回の大会に引き続き、次世代シンポジウムを行うことにいたしました。募集を行ったところ、幸い二件のご応募をいただくことができました。大会二日目午前に行われたのが、広島大学の佐藤大志教授をコーディネーターとする「いま『文選』を読む——中国古典文学の規範とその距離——」でありました。本パネルでは、佐藤大志「規範／古典としての『文選』——趣旨説明にかえて」にはじまり、陳獅（広島大学）「李白・杜甫の詩歌創作における『文選』の受容——「静夜思」と「春望」を例として——」、中木愛（龍谷大学）「作品と李善注の距離から考えること——殷仲文「南州桓公九井作」（『文選』卷二二）の「廣筵散汎愛、逸爵紆勝引」句をめぐる——」、高西

成介（高知県立大学）「語られる『文選』」、川島優子（広島大学）「明代の『文選』——凌濛初編『合評選詩』を中心として——」の五つの報告が行われました。『文選』が編纂された六朝の時代から明代に至るまで、また詩歌の世界ばかりでなく小説の世界に至るまで、中国文学における一つの規範的な選集としての『文選』の持つさまざまな姿が浮かび上がり、『文選』が決して六朝文学研究者の専有物ではありえないことをお示しいただきました。

大会二日目午後に行われたパネルが、京都府立大学の小松謙教授をコーディネーターとする「武人・武官と文学」であり、井口千雪（九州大学）「武定侯郭勳と通俗白話歴史小説」、小松謙「武人・武官と白話文学」、松浦智子（神奈川大学）「武人の物語と現実社会の動き——環流する虚構と現実——」、岡崎由美（早稲田大学）「演じる武芸、物語る身体——武術・芸能・武戯」の四つの報告が行われました。たしかに『三国志演義』にしても、また『隋唐演義』や『楊家将演義』にしても、武人が主人公になっているといえはるわけですが、一般に文の国と思われている中国において、武人・武官と文学の関わりについては正面から考えられてきたとはいえませんでした。このパネルでは、物語内容ばかりではなく、作品そのものの成立や流伝に、武人・武官が深く関わっていたことが示され、武と文学とのきわめて深い関わりが明らかにされました。

今回行われた二つのシンポジウムともに、これまで見過ごされていた問題に光をあて、さらなる研究の可能性を示された意欲的な内容で、どちらも大教室がいっぱいにな

るほどの聴衆を集めました。通常の研究発表に加え、こうした意欲的な発表の機会が増えて行けば、学会の大会はより活気づくのではないかと思います。両シンポジウムでご発表くださった先生方に厚く御礼申し上げます。

本大会では、哲学・思想部会で6件、文学・語学部会で18件、日本漢文部会で7件の合計31件の研究発表が行われました。いずれの部会、いずれの発表においても、多くの参加者を得て、活発な議論が行われておりました。大会を準備するにあたって、一つの大きな仕事は、司会者の依頼でした。発表の司会をお引き受けただいても、旅費が出るわけでも、参加費が免除になるわけでもなく、まったく手弁当のお仕事です。各発表の司会をお引き受けいただいた先生方には、重ねて御礼を申し上げたいと思います。

日本中国学会の大会は、すべて会員会費、参加費によって運営されています。今回大会の開催をお引き受けして、学会活動が、会員諸氏の自発的な参与によって支えられていることを身にしみて感じました。どこかに大スポンサーがあって、懇親会もただ、発表者、司会者には交通費や宿泊費も出る、といった会も悪くはないのかもしれませんが、会員全員が大会の支持者であるというこのスタイルのよさは捨てがたいように思います。これからも、より多くの会員の参加によって、大会がますます盛んになっていくことを願っております。

第一日目の晩には、キャンパス内のコミュニケーションプラザ（生協食堂）において懇親会が開かれました。ここは、かつて旧制一高以来の駒場寮があった場所です。懇親会も、200名を越えるみなさまにご参加いただき、なかなかの盛況でした。懇親会では、第70回を祝して鏡開きが行われ、池田知久元本学会理事長のご発声による乾杯の後、歓談の時を過ごしました。今回は院生会員の懇親会費を半額にしたこともあり、若い方の参加も多かったようで、学会の明るい未来がうかがわれたように感じました。

最後に、本大会準備会を代表し、あらためて多くのみなさまに御礼申し上げます。どうもありがとうございます。



懇親会での鏡開き

各種委員会報告

【大会委員会】

委員長 赤井 益久

○第70回大会

日本中国学会の第70回を記念する大会は、2018年10月6日(土)・7日(日)の両日、東京大学駒場キャンパス(大木康大会準備会代表)において開催されました。夏が戻ったような晴天に恵まれ、二日間で延750名の参加を得ました。31件の研究発表、2件の「次世代シンポジウム」、そして70回を記念する記念シンポジウム「世界的視野から見た中国学」(マイケル・ピュエット氏、クリスティーン・ラマール氏)は、大いに刺激的な視点と考察を聞く者に与えていました。初日の夕刻、生協食堂で開催されました懇親会も200名近い参加者を得て、大いに盛り上がりました。

○第71回大会

第71回大会は、2019年10月12日(土)・13日(日)の両日、関西大学(大会準備会代表は吾妻重二会員、吹田市山手町3-3-35)で開催されます。秋の観光シーズンとも重なりますので、宿泊施設の早めの予約をお願いいたします。

○次世代シンポジウム

ある特定研究課題でのシンポジウムが定着しつつあります。理事会では、現在の在り方を基本的に維持し、ひろく発表者を募ります。研究発表の多角化、複合領域化については、事態の推移を見て、さらに検討を進めて参ります。

【論文審査委員会】

委員長 大木 康

10月6日に論文審査委員会が開催され、学会報第71集の論文審査にむけて、スケジュール、作業工程等が確認された。

・学会報第70集には、依頼論文4篇、投稿論文14篇の合計18篇の論文を掲載することができた。来年1月15日に投稿論文が締め切られる第71集についても、多くの優れた論文が寄せられることを願っている。

・学会報の「論文執筆要領」が改訂された。いくつかある変更のうち、とりわけ大きな改訂は、学会報刊行にあたっての字体を定めた第8項の末尾に、

特に必要とするものについては、簡体字等での引用も可とする。

との文言を加えたことである。

論文の投稿にあたっては「論文執筆要領」を熟読のうえ、論文を作成していただきたい。論文の形式的不備による不採用をゼロにしたいのが、論文審査委員会の願いである。

【出版委員会】

委員長 釜谷 武志

7月29日に第1回出版委員会を開催して、「日本中国学会報」第70集に掲載する学界展望の講評原稿を検討しました。今年から語学部門の展望は、日本中国語学会に委託することになりましたが、哲学・文学・語学の3部門とも検討の対象にしました。

10月6日、東京大学での学術大会の1日目に、第2回の委員会を開きました。主な内容は以下のとおりです。

○学界展望について

・今年の秋から、本年の「学会報」に掲載した学界展望講評文をウェブ上でも公開する。また2017年度分も今年の12月末までに公開する。

・学界展望の担当の表記を変更する。これまでの「所属名(会員名)」から、「会員名(所属名)」に変更する。語学部門については日本中国語学会に一任するので、「日本中国語学会」とし、担当者名を併記する。

○学会報編集について

・校正時の諸問題が指摘された。原稿タイトルが掲載論文一覧と一致しなかった、原票の中国語題目欄に記載がなかった、執筆者のローマ字表記において、長音の区別がつかなかった、図表の挿入位置を指定していない原稿があった、校正戻し時に、朱入れゲラではなく

新規データを送付してきた人がいた等、いくつかの問題があった。こうした点については、今後、論文審査委員会と連絡を取りながら、問題の解決を図ることが確認された。

なお本年発行の「学会報」第70集は、学会開催のほぼ1週間前にお手元に届いたことと思います。昨年は宅配業者の待遇問題もあってか、配送にことのほか時間を要して、学会の前日に入手した会員もあったとうかがいました。今年は編集担当が印刷所と連携を密にして、平日に発送作業が行えるように工程を若干前倒しするなどの改善をはかりました。編集にご協力くださった執筆者にもお礼を申し上げます。

【選挙管理委員会】 委員長 松原 朗

本年度は、会則第11条にもとづき、評議員選挙、理事長選挙、監事選挙を以下の日程で行った。それぞれの結果については、別途公表されているのでここには記さない。

1) 評議員選挙

6月9日(土)に早稲田大学において投票用紙を発送し、7月7日(土)に同大学において開票を行った。

2) 理事長選挙

7月14日(土)に早稲田大学において投票用紙を発送し、8月4日(土)に同大学において開票を行った。

3) 監事選挙

10月5日(金)に東京大学(駒場キャンパス)で開かれた次期評議員会において投票と開票を行った。

4) 選挙管理委員会の開催

10月6日(土)に東京大学(駒場キャンパス)で選挙管理委員会を開催した。

【研究推進・国際交流委員会】 委員長 宇佐美文理

学術的コミュニティとして、なんらかの関連学問の拠点作りをする、あるいは組織的に支援を受けることを目指し、各種機関との連携を模索している。なお、表象文化部門の創設に関しては継続審議中。また、学会便りの執筆者選定を随時行った。

【広報委員会】 委員長 垣内 景子

広報委員会は、ホームページの管理・更新を主な任務としている。今年度も、通常の更新業務を随時行なった他、様々なお知らせを掲示した。

特に、学術情報の国際化が求められる今日、英語・中国語・韓国語のページの充実に力を注いでいる。

今後は、外部団体からの各賞や奨学金の情報、中国学関係の採用情報、及び各種講演会・研究会等のお知らせ等をさらに充実させ、中国学に携わる者にとっての情報の集積所となるよう努めたいと考えている。

現在、ホームページのリニューアルに向けて準備中である。より見やすく使いやすいホームページを目指して、様々な工夫を試みるつもりであるので、ご意見・ご要望があればお寄せいただきたい。

【将来計画特別委員会】 委員長 神塚 淑子

本年度の将来計画特別委員会は、10月6日、大会開催中の東京大学において行われた。主な議題は会員数減少への対応策で、毎年平均30名ほど減少している状況を食い止めるための方策について議論した。団塊世代の定年退職や昨今の人文学の全般的な状況から見て、会員減少はある程度やむを得ない面もあるが、若手研究者にとって魅力ある学会にして若手会員の増加をはかるための案として、国内の他の学会との積極的な連携や、若手研究者を対象としたセミナーの開催、あるいは、海外の大学や学会との連携を推進すべきである等の意見が出された。

なお、本委員会そのものの今後のあり方についても話し合った。本委員会はもともと会則改定のために設けられたもので、現在では任務が曖昧になっている。上記の方策案も、研究推進・国際交流委員会の任務と重なる点が多く、今後、両委員会合同の活動という形もありうると思われる。

2018年度 会員動向

●会員動向（2018年10月29日現在）

総会員数1635名、準会員数48機関、賛助会員数15社

●退会会員

○退会申出会員（今年度第1回理事会承認分） 26名、1機関

安立 典世	荒木 猛	大内 文雄
尾崎 正治	柿市 里子	胡 凌燕
黄 華珍	島田 悠	鍾 東
白杉 悦雄	田片 博伸	竹内 弘行
陳 正靨	鄭 月超	中村 浩一
林 稔	細川 直吉	前川 捷三
馬淵 昌也	丸山 茂	馬渡 幹子
三木 直大	水野 杏紀	麥谷 邦夫
矢放 昭文	連 清吉	

摂南大学図書館（準会員）



○退会申出会員（今年度第2回理事会承認分） 14名

大川完三郎	小林 岳	西念咲和希
櫻井 龍彦	櫻田 芳樹	邵 迎建
高橋 繁樹	中谷 征充	長谷川良純
星名 宏修	室谷 邦行	森賀 一恵
山本 仁	弓削 俊洋	

○4年間の会費滞納による退会会員 32名

●住所不明会員 2名

田 婧 宮内 四郎

※上記会員の連絡先をご存じの方は、お手数ですが事務局までご一報ください。

電子メール：info@nippon-chugoku-gakkai.org

訃報

『学会便り』2018年第1号発行以降、次の方々のご逝去の報が届きました。謹んでご冥福をお祈りいたします。（敬称略）

阪本ちづみ（関東地区）	2016年
川上 義三（近畿地区）	2017年1月12日
石津 達也（関東地区）	2017年1月27日
金子 泰三（関東地区）	2017年3月11日
石田 秀実（九州地区）	2017年10月30日
廣野 行甫（関東地区）	2017年12月2日
山口 爲広（九州地区）	2017年12月17日
内山 知也（関東地区）	2018年7月29日

2018年度 新入会員一覧

●新入会員一覧

10月5日に開催された2018年度評議員会において入会が承認された方々は、以下の通りです。

●通常会員 11名

浅野 雅樹	慶應義塾大学
金 鑫	京都大学(院)
金 博男	北海道大学(院)
黒田 祐介	東洋大学(院)
石 運	立命館大学(院)
詹 千慧	立命館大学
趙 海涵	北海道大学(院)
張 淑君	広島大学(院)
鄭 洲	神戸大学(院)
三須 祐介	立命館大学
余 祺琪	東洋大学(院)

なお、以下の方々については6月4日付で開催された持ち回り評議員会において入会が承認され、すでに今年度の会員名簿に掲載されています。

●通常会員 24名

秋山陽一郎	安部 浩子	岩本 優一
宇野 瑞木	鶴浦 恵	王 雯璐
戌法師 聖	河野 貴彦	木村真理子
櫻井 亮介	重野 宏一	鈴木 政光
戦 暁梅	高尾 有紀	段 書暁
中原 理恵	日比野晋也	武 茜
正岡 知晃	孟 夏	李 墨宇
陸 穎瑶	劉 斯倫	林 暁光



2019-20年度 役員一覽

理事長

金 文京

副理事長

釜谷 武志 小島 毅

理事

赤井 益久 浅見 洋二 吾妻 重二
宇佐美文理 大木 康 小川 恒男
垣内 景子 佐竹 保子 静永 健
松尾 肇子 松原 朗 卯 和順
渡邊 義浩

監事

牧角 悦子 (主席)
市來津由彦 内山 精也

評議員

赤井 益久 阿川 修三 浅見 洋二
吾妻 重二 有馬 卓也 井川 義次
市來津由彦 伊東 貴之 植木 久行
上田 望 宇佐美文理 内山 精也
大木 康 大西 克也 岡崎 由美
小川 恒男 垣内 景子 加藤 国安
加藤 敏 狩野 雄 釜谷 武志
神塚 淑子 稀代麻也子 木津 祐子
金 文京 小島 毅 小松 謙
小松 建男 近藤 浩之 齋藤 希史
坂口 三樹 佐竹 保子 佐藤 大志
佐藤普美子 佐藤 正光 佐藤鍊太郎
静永 健 末永 高康 竹村 則行
谷口 洋 種村 和史 土田健次郎
鶴成 久章 富永 一登 中里見 敬
野村 鮎子 萩原 正樹 濱田 麻矢

東 英寿 平田 昌司 藤井 省三
牧角 悦子 松尾 肇子 松原 朗
三浦 秀一 柳川 順子 湯浅 邦弘
卯 和順 和田 英信 渡邊 義浩

顧問

池田 知久 石川 忠久 今鷹 真
加地 伸行 興膳 宏 戸川 芳郎
野間 文史 堀池 信夫 三浦 國雄
村山 吉廣 吉田 公平

幹事

浅野 雅樹 須山 哲治 吉永 壮介



日本中国学会 2017年度 (平成29年度) 収支決算書

2017年4月1日～2018年3月31日

(単位：円)

科目	予算	決算	摘要	差額
収入の部				
1. 前年度繰越	¥17,687,308	¥17,687,308		¥0
2. 会員会費	¥10,000,000	¥9,746,000		¥-254,000
3. 寄付金	¥800,000	¥812,000		¥12,000
4. 預金利息	¥1,500	¥120		¥-1,380
5. 著作権料分配金	¥0	¥32,410		¥32,410
総計	¥28,488,808	¥28,277,838	(A)収入総計	¥-210,970

科目	予算	決算	摘要	差額
支出の部				
1. 事務局総務費	¥2,060,000	¥1,610,512	(1)～(7)	¥449,488
(1)印刷費	¥650,000	¥607,752	「便り」・封筒印刷費を含む	¥42,248
(2)通信費	¥650,000	¥545,809	「便り」発送費を含む	¥104,191
(3)交通費	¥100,000	¥22,680	事務局補佐員交通費等	¥77,320
(4)消耗品費	¥50,000	¥7,946		¥42,054
(5)庶務処理費	¥50,000	¥0		¥50,000
(6)雑費	¥350,000	¥216,325	うち振込手数料¥113,350	¥133,675
(7)業務委託料	¥210,000	¥210,000	斯文会	¥0
2. 事務局人件費	¥1,560,000	¥1,475,000	(1)(2)	¥85,000
(1)幹事手当	¥360,000	¥360,000		¥0
(2)謝金	¥1,200,000	¥1,115,000	事務局補佐員謝金等	¥85,000
3. 事務局会議費	¥420,000	¥257,183	(1)(2)	¥162,817
(1)会議費	¥120,000	¥84,223		¥35,777
(2)役員旅費	¥300,000	¥172,960	第1回理事会ほか	¥127,040
4. 事業費	¥5,200,000	¥5,189,297	(1)(2)	¥10,703
(1)学会報等刊行費	¥4,200,000	¥4,189,297	イ～ニ	¥10,703
イ. 印刷費	¥2,000,000	¥2,115,612	学会報及び名簿	¥-115,612
ロ. 編集費	¥1,500,000	¥1,500,000		¥0
ハ. 翻訳謝金	¥300,000	¥296,750	英文要旨作成	¥3,250
ニ. 発送費	¥400,000	¥276,935	佛サンセイ業務委託等	¥123,065
(2)学術大会運営費	¥1,000,000	¥1,000,000		¥0

科目	予算	決算	摘要	差額
5. 各種委員会運営費	¥1,230,000	¥870,847	(1)～(7)	¥359,153
(1)大会委員会	¥65,000	¥43,170		¥21,830
イ. 通信費	¥5,000	¥1,940		¥3,060
ロ. 会議・旅費	¥50,000	¥36,230		¥13,770
ハ. 謝金	¥5,000	¥5,000		¥0
ニ. 消耗品・雑費	¥5,000	¥0		¥5,000
(2)論文審査委員会	¥780,000	¥559,036		¥220,964
イ. 通信費	¥100,000	¥112,419		¥-12,419
ロ. 会議・旅費	¥600,000	¥343,216		¥256,784
ハ. 謝金	¥60,000	¥78,000		¥-18,000
ニ. 消耗品・雑費	¥20,000	¥25,401		¥-5,401
(3)出版委員会	¥225,000	¥195,149		¥29,851
イ. 通信費	¥5,000	¥720		¥4,280
ロ. 会議・旅費	¥200,000	¥179,429		¥20,571
ハ. 謝金	¥5,000	¥5,000		¥0
ニ. 学会便り編集費	¥10,000	¥10,000		¥0
ホ. 消耗品・雑費	¥5,000	¥0		¥5,000
(4)選挙管理委員会	¥20,000	¥5,492	非改選年度	¥14,508
イ. 通信費	¥5,000	¥492		¥4,508
ロ. 会議・旅費	¥5,000	¥0		¥5,000
ハ. 謝金	¥5,000	¥5,000		¥0
ニ. 消耗品・雑費	¥5,000	¥0		¥5,000
(5)研究推進・国際交流委員会	¥20,000	¥5,000		¥15,000
イ. 通信費	¥5,000	¥0		¥5,000
ロ. 会議・旅費	¥5,000	¥0		¥5,000
ハ. 謝金	¥5,000	¥5,000		¥0
ニ. 消耗品・雑費	¥5,000	¥0		¥5,000
(6)広報委員会	¥100,000	¥58,000		¥42,000
イ. 通信費	¥15,000	¥4,000		¥11,000
ロ. 会議・旅費	¥5,000	¥0		¥5,000
ハ. 謝金	¥5,000	¥34,000		¥-29,000
ニ. 消耗品・雑費	¥50,000	¥0		¥50,000
ホ. ホームページ管理費	¥25,000	¥20,000		¥5,000
(7)将来計画特別委員会	¥20,000	¥5,000		¥15,000
イ. 通信費	¥5,000	¥0		¥5,000
ロ. 会議・旅費	¥5,000	¥0		¥5,000
ハ. 謝金	¥5,000	¥5,000		¥0
ニ. 消耗品・雑費	¥5,000	¥0		¥5,000
1～5 予備費	¥10,470,000	¥9,402,839	支出費目としては計上しない	¥1,067,161
合計	¥18,018,808	¥0	(B)支出合計	¥9,402,839
次年度繰越金	-	¥18,874,999	(A)収入総計 - (B)支出合計	¥9,402,839
総計	¥28,488,808	¥28,277,838		¥210,970

学会基金

基本金	¥4,300,000
収入の部	
前年度繰越金	¥796,894
特別会計積立金拠出	¥0
預金利息	¥305
信託収益金	¥0
合計	¥797,199
支出の部	
日本中国学会費	¥80,000
次年度繰越金	¥717,199
合計	¥797,199

備考 (基本金内訳)

奥野基金	¥500,000
佐藤基金	¥200,000
池田基金	¥300,000
伊藤基金	¥300,000
横立基金	¥3,000,000

上記の通り、相違ないことを認めます。

2018年4月16日
日本中国学会監事

牧角悦子 監
岡崎由美 監
永富青地 監

日本中国学会 2018年度 (平成30年度) 予算書

2018年4月1日～2019年3月31日

(単位：円)

科目	予算	摘要
1. 前年度繰越	¥18,874,999	
2. 会員会費	¥10,000,000	
3. 寄付金	¥800,000	
4. 預金利息	¥1,500	
5. 著作権料分配金	¥0	
総計	¥29,676,499	

科目	予算	摘要
1. 事務局総務費	¥2,460,000	(1)～(7)
(1)印刷費	¥850,000	「便り」・封筒等を含む
(2)通信費	¥850,000	「便り」発送費を含む
(3)交通費	¥100,000	
(4)消耗品費	¥50,000	
(5)庶務処理費	¥50,000	
(6)雑費	¥350,000	振込手数料および対外費を含む
(7)業務委託料	¥210,000	斯文会
2. 事務局人件費	¥1,560,000	(1)(2)
(1)幹事手当	¥360,000	
(2)謝金	¥1,200,000	事務局補佐員謝金を含む
3. 事務局会議費	¥720,000	(1)(2)
(1)会議費	¥120,000	
(2)役員旅費	¥600,000	第1回理事会+引き継ぎの第4回理事会
4. 事業費	¥5,500,000	(1)～(3)
(1)学会報等刊行費	¥3,900,000	イ～ニ
イ. 印刷費	¥2,000,000	学会報及び名簿
ロ. 編集費	¥1,200,000	
ハ. 翻訳謝金	¥300,000	英文要旨作成
ニ. 発送費	¥400,000	㈱サンセイ業務委託等
(2)学術大会運営補助費	¥1,000,000	
(3)70年記念事業費	¥600,000	イ～ロ
イ. 70年大会補助費	¥500,000	
ロ. HP アップデータ整理	¥100,000	

科目	予算	摘要
5. 各種委員会運営費	¥1,330,000	(1)～(7)
(1)大会委員会	¥65,000	
イ. 通信費	¥5,000	
ロ. 会議・旅費	¥50,000	
ハ. 謝金	¥5,000	
ニ. 消耗品・雑費	¥5,000	
(2)論文審査委員会	¥780,000	
イ. 通信費	¥100,000	
ロ. 会議・旅費	¥600,000	
ハ. 謝金	¥60,000	
ニ. 消耗品・雑費	¥20,000	
(3)出版委員会	¥225,000	
イ. 通信費	¥5,000	
ロ. 会議・旅費	¥200,000	
ハ. 謝金	¥5,000	
ニ. 学会便り編集費	¥10,000	
ホ. 消耗品・雑費	¥5,000	
(4)選挙管理委員会	¥120,000	改選年
イ. 通信費	¥15,000	
ロ. 会議・旅費	¥60,000	
ハ. 謝金	¥40,000	
ニ. 消耗品・雑費	¥5,000	
(5)研究推進・国際交流委員会	¥20,000	
イ. 通信費	¥5,000	
ロ. 会議・旅費	¥5,000	
ハ. 謝金	¥5,000	
ニ. 消耗品・雑費	¥5,000	
(6)広報委員会	¥100,000	
イ. 通信費	¥15,000	
ロ. 会議・旅費	¥5,000	
ハ. 謝金	¥5,000	
ニ. 消耗品・雑費	¥50,000	
ホ. ホームページ管理費	¥25,000	
(7)将来計画特別委員会	¥20,000	
イ. 通信費	¥5,000	
ロ. 会議・旅費	¥5,000	
ハ. 謝金	¥5,000	
ニ. 消耗品・雑費	¥5,000	
1～5 予備費	¥11,570,000 ¥18,106,499	
合計	¥29,676,499	

学会基金

基本金	¥4,300,000
前年度繰越金	¥717,199
預金利息	¥1,000
信託収益金	¥500
合計	¥718,699
日本中国学会費	¥160,000
次年度繰越金	¥558,699
合計	¥718,699

備考 (基本金内訳)

奥野基金	¥500,000
佐藤基金	¥200,000
池田基金	¥300,000
伊藤基金	¥300,000
積立基金	¥3,000,000

事務局からのお知らせ

彙報

2018年度第1回理事会（6月3日開催）での決定事項について、6月4日付で持ち回り評議員会を開催した。

報告・審議事項は以下の通り。

【報告事項】

- ・2018年度日本中国学会賞受賞者の決定について

[哲学・思想部門]

藤田 衛 会員

[[『易緯』爻辰説の考察]

[文学・語学部門]

稲森 雅子 会員

[孫楷第の中国小説書目編纂と日中の学术交流]

- ・新入会者の決定について

【審議事項】

- ・京都大学人文科学研究所の推薦状について

7月28日付で持ち回り評議員会を開催した。審議事項は以下の通り。

- ・顧問の委嘱について

10月5日に開催した次期（2019-20年度）評議員会における報告・審議事項は以下の通り。

【報告事項】

- ・2019-20年度評議員選挙の結果について
- ・2019-20年度理事長選挙の結果について
- ・その他

【審議事項】

- ・2019-20年度副理事長・理事の委嘱について
- ・2019-20年度監事の選出
- ・その他

続いて開催した2018年度評議員会における報告・審議事項は以下の通り。

【報告事項】

- ・理事長報告
- ・2019-20年度評議員選挙の結果について
- ・2019-20年度理事長選挙の結果について
- ・2019-20年度副理事長・理事の委嘱について
- ・2019-20年度監事選挙の結果について
- ・各種委員会報告
- ・『日本中国学会報』第70集及び会員名簿の発行について
- ・学会報編集担当校・大会開催校等について（2019年度）

学会報編集担当

門脇 廣文 会員（大東文化大学）

学界展望執筆担当

哲学／三浦 秀一 会員（東北大学）

文学／齋藤 希史 会員（東京大学）

語学／日本中国語学会

学会便り編集担当（2018年第2号・2019年第1号）

静永 健 会員（九州大学）

大会開催校 関西大学（2019年10月12日～13日）

- ・会員動向について
- ・その他

【審議事項】

- ・2017年度決算・監査報告
- ・2018年度予算案
- ・新入会員の承認
- ・2018年度総会次第について
- ・学会基礎データのホームページアップについて
- ・会則の改正について
- ・その他

翌10月6日の2018年度総会において、評議員会での議決事項を報告した。

10月12日付で持ち回り評議員会を開催した。審議事項は以下の通り。

- ・会則の改正について

◎顧問の委嘱について

2018年度第1回理事会（6月3日開催）、持ち回り評議員会（7月28日付）の議を経て、次の二会員を顧問に委嘱することとなりました。

堀池 信夫 会員
野間 文史 会員

◎会則の改正について

2018年度第2回理事会（10月5日開催）、2018年度評議員会（同日開催）、持ち回り評議員会の議を経て、以下の通り会則と選挙規約が改正されました（2018年10月28日付）。いずれも役員選挙に関して曖昧になっていた点を明確にしたものです。

会 則

第12条（役員の職掌）

[改正前]

2. 副理事長は理事長を補佐し、理事長に事故ある時は副理事長がその任を代行する。

[現 行]

2. 副理事長は理事長を補佐し、理事長に事故ある時 または任期中に役員定年を迎える時は副理事長がその任を代行する。

選挙規約

[現 行] 項目の追加

- 4 当選者が辞退した場合は、次点者を繰り上げる。

◎会費の納付について

会費未納の方は、至急ご送金願います。2ヶ年（2017・2018年度）未納の方には、今年度の学会報を送付しておりません。また、4年間滞納されますと除名処分となりますのでご注意ください。

◎住所・所属機関等の変更について

住所や所属機関等に変更がありましたら、速やかに事務局へお知らせください。特に学生会員の方が学生身分を喪失した場合には、必ずご連絡願います。電子メール、郵便、あるいはファックスをご利用ください。

◎クレジットカードによる会費決済について

昨年度より、海外在住の会員を対象として、クレジットカードによる会費決済を開始しています。ご希望の方は、事務局まで電子メールでご連絡ください。折り返し、決済用ページのURLをお送りいたします。なお、利用可能ブランドはVISA・MASTERのみです。ご了承ください。

日本中国学会事務局

電子メール：info@nippon-chugoku-gakkai.org

郵 便：〒113-0034 東京都文京区湯島1-4-25

斯文会館内

ファックス：03-3251-4853

ゆうちょ銀行振替口座

口座番号：00160-9-89927

加入者名：日本中国学会

「国内学会消息」についてのお知らせ

「国内学会消息」は、来年4月発行予定の「学会便り」に掲載することになっています。

2018年1月から12月までに開催された国内学会の原稿は、来年（2019）2月末までに、下記あてに電子メールでお送りください。なお、紙面の都合上、お送りいただいた原稿を編集局で一部加工することがあります。また、校正はありませんので、予めご承知おきください。

shizuka@lit.kyushu-u.ac.jp（九州大学・静永あて）

「日本中国學會報」論文執筆要領

日本中国学会

応募資格

1. 日本中国学会会員に限る。

使用言語等

2. 応募原稿（以下「原稿」と略称）は和文によるものとし、未公開のものに限る。ただし、口頭で発表しこれを初めて論文にまとめたものは未公開と見なす。

原稿枚数等

3. 原稿は校正時に加筆を要しない完全原稿とする。
4. 原稿枚数は、本文・注・図版等を合わせて、以下のよう
に定める。ワープロ使用の場合、用紙サイズはA4、1行30字、毎ページ40行、文字は本文、注ともに10.5ポイントによって印字し、18ページ以内（厳守）とする。この書式に合わないものは、受理しないこともあるので、注意すること。採用論文刊行の段階で、規定のページ数を超過した場合には、調整を求めることがある。なお、手書き原稿提出の場合は400字詰原稿用紙54枚以内（厳守）とし、論文が採用された場合、電子データを別途提出する。電子データ入力を学会に依頼する場合、加算費用は執筆者負担となる。
5. 図版を必要とする場合、『學會報』の組版における占有面積により文字数を換算する。『學會報』半ページ分が、ほぼ25行（1行30字）である。図版原稿は原則としてそのまま版下として使用できる鮮明なものとし、掲載希望の縦・横の寸法を明示する。

体裁・表記等

6. 原稿は縦書きを原則とする。特に必要とするものについては、横書きも可とする。
7. 引用文は内容に応じて原文、訳文、書き下し文のいずれかを用いるものとする。原文の場合は該当する訳文または書き下し文を、訳文または書き下し文の場合は該当する原文を本文中または注に明示する。ただし、一読して疑問の生ずる余地がないものについては、省略することを認める。中国語以外の外国語の引用もこれに準ずる。校勘・版本研究等内容上適切と認められるものについては、原文のみ引用することを妨げない。原文に返り点・送り仮名をつけることは原則として認めない。日本漢学・日本漢文等に関する内容のもので、訓点の施し方自体を論ずる場合はこの限りではないが、加算された印刷費は執筆者の負担とすることがある。
8. 原稿は旧漢字体・常用漢字体のいずれの使用も可とするが、刊行にあたっては全文を原則として旧漢字体（印刷標準字体）に統一する。ただし、本人の申し出によって、常用漢字体での印刷を認める。刊行にあたっては、本文9ポイント、括弧内は8ポイントを、注はすべて8ポイントの活字を使用する。特に本文括弧内を9ポイントにする場合および内容上特に異体字であることが必要な場合は、当該箇所に明記する。特に必要とするものについては、簡体字等での引用も可とする。
9. 注は、各章・節ごとにつけず、通し番号を施して全文の末尾にまとめる。割注は用いない。注の表記に

ついては、本学会が定めたガイドラインに沿うことが望ましい。

10. 中国語のローマ字表記は、執筆者の選択にゆだねるが、同一論文中にあっては、ウェード式・漢語拼音方案等何らかの統一があることが望ましい。ただし、特殊な綴りに通用している固有名詞（例：孫逸仙 Sun Yat-sen）、本人が自分の名前に使用している綴りについてはその使用も認める。日本語のローマ字表記は、ヘボン式の使用を原則とする。

論文要旨

11. 応募時の原稿には2000字以内の和文の論文要旨を添付する。
12. 学会報掲載の論文要旨は、英文とする。論文掲載者は、完成原稿提出時に、1200字程度の日本語要旨を添付する。

原稿提出

13. 原稿などは必ず書留により下記に郵送するものとし、毎年1月15日までの消印のあるものを有効とする。持参は認めない。

〒113-0034 東京都文京区湯島1-4-25
斯文会館内 日本中国学会

14. 応募の際、審査を希望する部門（哲学・思想・文学・語学、日本漢学）の別を原稿第1ページに朱書する。ただし、論文の内容により、複数部門にわたる審査を希望することができる。
15. 応募時には、本文・要旨をそれぞれ4部ずつ提出する。原稿は原則として返却しない。
16. 応募時には、①原稿のやりとりをする際の連絡先（住所、電話、メールアドレス）、②現在の所属先、③最終出身大学及び修了（退学）年を書いた紙を提出する。（書式は自由。）

校正

17. 執筆者校正は再校までとする。校正時の加筆・訂正は初校段階に限り、必要最小限のものについてのみ認める。

抜刷

18. 論文抜刷に関わる作成費用等は本人負担とする。

その他

19. 掲載論文については、電磁的記録として記録媒体に複製する。これを日本中国学会の会員、図書館、研究機関、それらに準ずる組織及びその他の公衆に譲渡、貸与、送信すること、またその際に必要と認められる範囲の改変を行うことがある。

(昭和62年10月11日制定)	(平成13年5月13日修正)
(平成14年10月13日一部修正)	(平成15年10月5日一部修正)
(平成19年10月7日一部修正)	(平成20年5月17日一部修正)
(平成21年10月11日一部修正)	(平成22年6月6日一部修正)
(平成22年10月10日一部修正)	(平成23年10月9日一部修正)
(平成24年10月7日一部修正)	(平成25年3月31日一部修正)
(平成25年10月13日一部修正)	(平成27年10月10日一部修正)
(平成29年6月12日一部修正)	(平成30年6月3日一部修正)